

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第 39 集 (2007年度) 2008年 3 月発行：15-31

大学カリキュラムの分析枠組み

—カリキュラム研究の展開を手掛かりとして—

黄 福 涛

大学カリキュラムの分析枠組み

—カリキュラム研究の展開を手掛かりとして—

黄 福 涛*

1. はじめに

1991年以降、大学設置基準の大綱化を契機として、国立大学をはじめ、日本の大学教育全体、特に学士（学部）課程カリキュラムについてさまざまな改革の試みを実施されている。その結果、国公立を問わずほとんど全ての大学において学士課程カリキュラムの構造や内容に著しい変化が見られるようになった。しかしこれまでの日本における大学カリキュラムに関する先行研究は、政府の関連政策の分析・解説や、個別大学教育の現場における様々な授業開発・改善の試みを紹介するものが多く、学術的・理論・哲学的な視点からの大学カリキュラム理論研究、特に大学カリキュラムの開発と変化のメカニズムに関する研究が十分に蓄積されてきたとは言い難い。国立大学の法人化を契機に、各大学は自主的、かつ自律的な運営の下、特色がある人材育成を行うことが求められるようになったため、大学カリキュラムの理論、特にその開発に関する研究はますます重要になってきたと言える。したがって、本論文は、カリキュラムに関する先行研究の成果を整理したうえで、大学カリキュラムの分析および研究枠組みを検討することを目的とする。なお、本稿で使用する「大学」という概念は、全高等教育機関を意味している。

2. カリキュラム研究の歴史的展開

周知のように、学校教育が始まると同時に学校教育に不可欠であるカリキュラムが存在したことは間違いない。古代のギリシャ時代には、現在のような大学という組織はなかったが、ギリシャの哲学者プラトンが創設した「学院」(academy) や、アリストテレスが創立した教育機関ライキウム (Lyceum, B.C. 335-323), および

表1. 古代ローマ時代の学校教育内容

I	II	III
文法	幾何	医学
修辞	算術	建築
弁証法	天文	
	音楽	

出典：Olaf Pedersen (1977). *The First Universities*. English translation by Richard North. Cambridge University Press, p.8.

*広島大学高等教育研究開発センター教授

イソクラテス (Isocrate, B.C. 436-338) 修辞学校において、哲学者や演説者の養成を目的とした教育内容が系統的に編成されていたと指摘されている (Clarke, 1971; Marrou, 1956)。

古代ローマ時代の学者ワロ (Varro) は『自由学科Ⅸ』(Disciplinarum Libri II) のなかで、当時の学校における教育内容について、次のようにまとめている (表1)。

また、紀元前5世紀前半、古代ローマの学者はマルティアヌス・カペラ (Martianus Capella, 365-440) 自身が編集した百科全書のなかで、はじめて「文法、修辞、弁証法、算術、数学、幾何、天文、音楽」を「リラーベルアーツ」や「自由7科」(seven liberal arts) と定義し、以来、ヨーロッパ中世大学だけではなく、世界の大学課程カリキュラムの編成に大きな影響を与えてきた。

古代ギリシャ時代には中世大学における課程カリキュラムの基礎部分がすでに出現していたにもかかわらず、カリキュラム、特に大学カリキュラムに関する研究は20世紀から本格的に始まったと考えられる。

1918年アメリカシカゴ大学フランクリン・ボビット教授が『カリキュラム』を出版しており (Bobbitt, 1918)、本書は教育史上、カリキュラムの理論研究の最初の学術書であるとみられている。この本の出版によってカリキュラム研究は1つの専門研究領域として認められるようになった。ボビットは学校教育カリキュラムが社会や国家の諸問題を解決する1つの有効な手段として考え、人類の諸活動を分析したうえで、社会や人類の発展に必要な知識や、能力、態度などに関する要素を特定し、それらに基づいてカリキュラム編成を行うことを提唱している。またカリキュラム編成の際に、その計画や開発は教育目的・目標と一致させるべきであると強調している。そのほか、この時期にはアメリカの教育学者デューイの理論が大きな影響を及ぼし、学校教育カリキュラムの研究にも多大な貢献をした。例えば、デューイは教育プロセス、特に学校教育カリキュラム編成について、心理的側面と社会的側面という2つの要素が密接に関連しており、両者は等しく重要であると主張した。彼は人間の自発性を重視すると同時に、人間の自発的な成長を促すための環境を整えることが教育の役割だと強調したのである (Dewey, 1938)。ボビットやデューイの教育論は近代カリキュラム理論の創始者タイラー (Tyler) の研究に直接影響を及ぼした。

1949年アメリカの学者タイラーは『カリキュラムと教授の基礎原理』を出版し、次の通り「タイラー原理」と呼ばれるカリキュラム編成の理論を確立した (Tyler, 1949)。

- (a) 学校はどのような教育目標を達成しようとするべきか？
- (b) こうした目標を達成するためにどのような経験が提供できるのか？
- (c) どうやってこうした教育経験を有効に編成できるのか？
- (d) どうやってこうした目標が達成されたかどうかという点に対して判断できるのか？

この「タイラー原理」は、近代カリキュラム理論が発足したことを表している。20世紀以来、さまざまなカリキュラム理論が出されてきたが、そのほとんどがこの「タイラー原理」に基づいて展開されてきていることは言うまでもない。

一方、日本のカリキュラム研究史に関する主な成果としては、1985年刊行された安彦忠彦の著作

『カリキュラム研究入門』が挙げられる。1999年の新版では1990年代前半までの日本のカリキュラム研究について整理されている（安彦編，1999）。以来，理論的，かつ系統的な視点からカリキュラムに関する研究成果はほとんどみられていないようである。

3. カリキュラム研究の主な課題

以下，前に述べたカリキュラムに関する研究の歴史的概観を踏まえ，主にカリキュラムの概念や，レベル，目標，モデルなどについて今日のカリキュラム研究に影響を与えるであろうと思われる理論や学説を取り上げる。

(1) カリキュラムの定義と意味

日本語のカリキュラムという単語はラテン語のcurriculumに由来していると一般的な見方である。このcurriculumというラテン語を英語に訳すとracecourseになり，「競馬場」や「競走場」を意味している。比喩的にいえば，ある方向へ特定のコースを回る，走るというように解釈できるが，教育上のcurriculum，言い換えればカリキュラムという概念はきわめて多義的であり，その定義は，時代によって常に変わるだけでなく，各国・地域によっても大きな違いが見られる。したがってここではカリキュラムの概念を狭義と広義に分けて先行研究を整理してみたい。

狭義のカリキュラムについて，「最も一般的な定義は連続学習内容」(the most common definition of curriculum is a course of subject matter of studies) である。例えば，エブリンは「カリキュラムは学校で教えられているすべてのものである」(curriculum refers to what is taught in schools) と定義している (Evelyn, 1996)。

しかし，それに対する批判も多く，例えば，ケリーは「カリキュラムの定義は実際に効果的であるいは生産的な結果をもたらすという目的を達成すれば，単に知識・内容，あるいは学校で教えられ，伝達される科目を言及するのみでは不十分である。こうした知識の目的と正当な理由を，これらの科目は受講者に対してありそうな目的や，持っている意図を説明しなければならない」と指摘している (Kelly, 1990, p.3)。これにより，彼はカリキュラムを分類し，内容と結果としてのカリキュラム (curriculum as content and product) とプロセスと開発としてのカリキュラム (curriculum as process and development) に分けて整理しており，いわゆる広義の意味でカリキュラムを捉えていると言える (Kelly, 1990)。

カミングスは学校のカリキュラムの概念をさまざまな利害関係者 (stakeholders) により，教えられるべきこと，なぜ教えられるのか，どのように教えられるのか，どこで教えられるのかという点について意見が一致することであると論じている。またこの複数の利害関係者によるコンセンサスはフォーマルの科目内容を含んでいるだけではなく，近代学校におけるすべての日常の行事 (routine) や共同のカリキュラム (co-curriculum) を通じて伝わっていると強調している (Cummings, 2003)。

現在，カリキュラム (Curriculum) に関する最も詳しい定義や説明はおそらく『カリキュラムの

国際百科事典』(the International Encyclopedia of Curriculum) のなかで収録されているものであろう。例えば、この百科事典によれば、カリキュラムの概念についてだけでも9つの解釈がある (Lewy, 1991)。

日本において、井門氏は「カリキュラムとは、学習者の精神的・身体的発展にあわせ(年齢経験の段階ごとに)、当人に社会化を順調に行わせるために、知識の学習と技術習得を可能とさせる教育・研究上の計画構成ということになる」と定義しているため、基本的にはカリキュラムを狭義に解釈している(井門, 1985)。

(2) カリキュラムの種類とレベル

カリキュラムの概念が多岐にわたるため、1960年代以後、一部の学者はカリキュラムを広義に捉えると同時に、カリキュラムをいくつかの種類やレベルに区別して研究を進めてきた。例えば、前述のように、ケリーはカリキュラムの概念の全体性 (totality) と潜在的カリキュラム (the 'hidden' curriculum) を認識する必要を強調すると共に、計画されたカリキュラム (the planned curriculum) と学生が実際に身に着けられたカリキュラム (the received curriculum), フォーマルなカリキュラム (the formal curriculum) とインフォーマルなカリキュラム (the informal curriculum) を区別する重要性も強調している (Kelly, 1990, pp.3-7)。

1950年代から、グッドラドをはじめとする研究チームによりカリキュラムの計画や開発に対して影響を与えたファクターに関する成果が今日も高く評価されている。この研究チームの研究によると、カリキュラムの計画や開発はさまざまな要因やファクターによって行われるため、カリキュラムのレベルという概念が示されている。彼によると、「カリキュラムのレベルとは、学生とその学生のために計画されたカリキュラムとの間の遠隔である」。(Goodlad and Su, 1992)。また、少なくとも4つのレベルにおけるさまざまなファクター (forces) がカリキュラムの計画 (decision-making) に対してインパクトを与えたという学説も明らかにされている。具体的には、社会的 (societal, 関係管理機構や部門), 機関的 (institutional, 学校や、カレッジ, 大学), 授業的 (instructional, 教員), 個人や経験的レベル (personal/experiential, 学生) である。この分析に基づいて、カリキュラムをさらに次のような5つのレベルに分けることができる。すなわち、理想的・理念レベルにおけるカリキュラム (ideal curriculum), フォーマルなカリキュラム (formal curriculum, 例えば、政府や国家, 地方教育委員会が定めた教育内容), 理解されたカリキュラム (perceived curriculum, 各関係者がそれぞれの判断基準や価値観に基づいてフォーマルなカリキュラムに対する認識や解釈), 実際に教えられるカリキュラム (operational curriculum), 学生が自ら身に付けたカリキュラム (experienced curriculum) である (Goodlad and Associates, 1979)。

グッドラドを代表としたカリキュラムのレベルに関する研究は、1950年代から続いており、特に教育現場におけるカリキュラムの計画や、その開発に関する意思決定、プロセスに大きな影響を及ぼしてきた。

(3) カリキュラムの目標 (goals) とモデル

19世紀から多くの学者はすでにカリキュラムの目標や機能から多種多様なカリキュラムモデルを整理してきた。例えば、19世紀のイギリスのジョン・ロック (John Lock, 1632-1704) は紳士 (gentleman) 養成を目的とする liberal education 学習内容を中心とするモデルを、そして20世紀のアメリカのデューイは子どもを中心とする進歩教育理念およびそれに基づいたカリキュラムモデルを周知の例として挙げている。このように20世紀前半までさまざまな教育理論や理念に基づいて、学校教育レベルにおいていくつかのカリキュラムモデルが取り上げられてきたが、基本的には2つの対立的なモデルを中心に展開されてきた。つまり、学生個人のニーズに対応するカリキュラムモデルと社会のニーズに応えるためのカリキュラムモデルである。

しかし、戦後の社会的変化や科学技術の発達、特に中等教育の大衆化、教育の国際化、グローバル化の進展に伴って、学校教育は多様化した時代を迎えることになり、再び教育活動の中心的役割を担うカリキュラムの改革が迫って来ている。1990年代以降、異なる教育理念や目標に基づいて多くのカリキュラムモデルが出現したが、アメリカ学者アーサー・エリスは長年の学校教育の実践に基づいて、3つのカリキュラムモデルをまとめている。具体的には、学習者中心のカリキュラム (The learner-centered curriculum)、社会志向のカリキュラム (The society-centered curriculum) と知識中心のカリキュラム (The knowledge-centered curriculum) という3つのカリキュラムモデルである。またそれぞれのモデルに対して特徴 (emphasis)、教員の役割 (teaching)、学生の役割 (learning)、環境 (environment)、評価 (assessment) という5つの側面から詳細に分析している (Ellis, 2004)。

4. 大学カリキュラム研究の主な課題

初等・中等教育カリキュラムに関する先行研究に比較すると、大学カリキュラム研究は歴史も短く、研究成果もそれほど多くないといっても過言ではない。イギリスやアメリカをはじめとする諸外国において、19世紀から大学教育や大学カリキュラムに関する議論があったが、大学カリキュラム研究が本格的に行われるのは第2次世界大戦以後のことであろう。以下、この主な研究成果を検討したうえで、大学カリキュラムの概念および分析枠組みを整理してみたい。

(1) 先行研究

アメリカ学者ドレッセルが1963年刊行した『高等教育における学士課程カリキュラム』という本のなかで (Dressel, 1963)、大学カリキュラムの定義や歴史に触れ、特に学士課程カリキュラム計画の原理、カリキュラムの開発理論、アメリカの大学における若干の学士課程カリキュラムモデルを論じている。おそらくこの研究は初めて学士課程カリキュラムに焦点をあてられたものであろう。

1970年代からは、カーネギー財団によりアメリカの学士課程カリキュラムに関する報告書や研究報告のシリーズが次々刊行された。例えば、1977年の『カレッジカリキュラムの使命』 (Mission of the College Curriculum) はその研究報告書の1つである (Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1977)。また、同年に刊行された『学士課程カリキュラムハンドブック』 (Levin, 1977) も

大学や学士課程カリキュラム研究者や大学管理者にとって最も重要な参考文献の1つである。このハンドブックは第1部「学士課程カリキュラムの現状」と第2部「学士課程カリキュラムの比較的・歴史的視点」から構成されている。本書は学士課程カリキュラムに関するキーワードを解釈する一方、高等教育の哲学や、学士課程教育、特にアメリカにおける学士課程カリキュラムの歴史的変化、世界主要諸国における学士課程教育の概況についても詳細に論じている。1997年には、スタークとラツッカ教授が共同で編集した『カレッジカリキュラムの開発』という著書が出版されている。この著書はカリキュラムの定義、カリキュラムの開発及びカリキュラムの改善という3つの章から構成されており、理論的、かつ系統的学士課程カリキュラムをめぐる主要な課題を検討したものである。特に、著者はカリキュラム (curriculum) という概念が多義的で複雑なもので、それに代わりに「学術プラン」(academic plan) という用語を提案し、学術プランが置かれている環境・コンテキストについて社会学や、組織学、心理学、管理学などの視点から分析枠組みを作り上げた (Stark and Lattuca, 1997)。さらにASHE (Association for the Study of Higher Education) により刊行された『カレッジと大学のカリキュラム』という論文集も大学カリキュラム研究のきわめて重要な文献として評価されている (Lattuca et al., ed., 2002)。

日本では、戦後から1990年代初期までの先行研究は、基本的には一般教育や教養教育に焦点をあてて展開されてきた。和田小六や、扇谷尚、小林哲也などを代表とした研究成果が残っている。例えば、小林氏は、教育理念、改革原理、そして教育制度の3つの視点から、一般教育に焦点にあてて、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、日本におけるカリキュラムの形成、変化、諸国の特質、大学教育の位置づけを分析している (小林, 1997)。

近年の日本における学士課程カリキュラムに関する先行研究としては、関正夫の研究レビューが取り上げられる。関氏のレビューは、1990年前後期から2002年における日本の大学教育改革の最重要課題であった学士課程カリキュラム改革等に関する主要著書や論文等を主たる考察の対象とし、基礎的概念、教養教育、学士課程教育全般、及び4つの専門分野の学士課程教育という対象領域に絞って、大学のカリキュラム改革計画等において「知の変動と社会の変動」への対応、「経済(経営)の論理と学問の論理」及び「高等教育大衆化による学生の変化と教師役割の変化」への対応という3つの視点から論じている。また氏は、カリキュラム研究の進展過程で登場したカリキュラム論に関して、「カリキュラム構成」論、「カリキュラム開発」論及び「カリキュラム・デザイン」論という3つの理論的観点についても論じている。さらに大学カリキュラム改革に関する研究活動や改革構想等は、システムレベル：大学政策・学術政策・科学技術政策の答申・提言等及び大学基準協会など非政府レベルの「専門分野別の教育基準」など全国レベル：諸学・協会・団体等による調査研究や改革提言など、機関レベル：各大学・学部による調査研究や改革提案など及び個人(研究者)レベルの教育改革に関連する研究の成果などについて検討している (関, 2006)。

1991年設置基準大綱化に伴い、国際比較的・実証的な視点から、特に1990年代以来の諸外国及び日本の大学のカリキュラム改革を対象に、さまざまな外国の事例研究及び日本において実施されたアンケート調査を中心に議論が盛んになった。そのうち館氏 (館, 1997)、清水氏他 (清水, 井門, 1997)、関氏 (関, 1998)、有本氏 (有本, 2003)、及び絹川氏による研究成果が特に注目されてい

る（絹川，2006）。

以上のように，日本のカリキュラムに関する先行研究においては，歴史的，比較的，実証的などの視点から大学カリキュラムの理論や，開発，評価，現状などに言及するものが多かったが，理論的・哲学的・社会的レベルにおいて大学カリキュラムの分析枠組みに関する先行研究の成果はまだ少ない。

(2) 大学カリキュラムの定義，分析視点及び内容

同様に大学カリキュラムの概念についても，狭義及び広義的な視点から定義ができる。以下，先行研究を踏まえて，その概念の定義を試してみる。

初等・中等教育レベルにおけるカリキュラムと比較すると，その狭義の概念としては，大学を含む高等教育機関において提供される正式学習科目や教育プログラムであると考えられる。一方，広義の概念は，主にカリキュラムの目的，対象，内容，開発，教授法及び結果・評価（学位）といった側面から解釈できる。具体的には，異なった利益集団や関係者により定められた教育目標や基準，政策に基づいて，青年，少なくとも成人の域に達した者，あるいは社会人を対象に，教育対象の精神的・身体的成長レベルよりも学問の論理や，人格の完成や幅広い知識を持つ教養の伝達，国家や社会のニーズへの対応を考慮して組み込まれる顕在的・潜在的学習内容である。またこうした学習内容はより自由に，かつ多様化した教授法（講義やゼミナール，インターンなど）により開設されており，その学習の結果が学位や専門資格などの形で現れている。

以上に述べた講義の概念に基づいて，大学カリキュラムに関する分析視点と研究フレームワーク

表2. 大学カリキュラム研究に関する視点・要素

理念・目的	哲学的，理論的，特定のイデオロギーなど				
政策・方針	ファクター		プロセス	形式	実施手段
	政府	中央			
		地方			
	学術・専門職団体				
市場（企業など）					
高等教育の構造	機関の種類（設置者別や専門分野別）と教育段階，高等教育と高校・大学院との接続や役割分担，伝統の大学と非大学セクターとの連携や役割分担，学生の構成（年齢別，男女別）及び分布（機関別，教育段階別，学問分野・専攻別）など。				
カリキュラム （機関レベル）	教育使命，人材育成の具体像と計画，全学カリキュラムの構造と内容，教育組織の構造，学生の募集と構成，教員及び学生支援体制など。				
カリキュラム （学部・専攻・授業レベル）	学士課程教育の理念・目標，現行のカリキュラムの構造と内容，指導体制，学生の受け入れ，卒業要件，教育組織の構造，支援体制，教授法など。				
結果・効果	卒業生の量（進路や進学状況）と質（カリキュラムの達成度）				

を取り上げてみたい（表2）。

理念・目的

大学カリキュラムの理念は、基本的には、高等教育の目的や具体的な人材像の基礎となる哲学思想やイデオロギーを意味している。初等・中等教育と同様に、大学カリキュラムの理念も多種多様である。

例えば、イギリスの学者ピーター・スコットはイギリスの事例を中心に、社会的変化に伴った高等教育の目的変化について考察している。彼は歴史的視点からリベラル教育（liberal education）、一般教育（general education）、普及教育（popular education）及び学際教育（inter-disciplinary education）の特徴を分析したうえで、高等教育の大衆化、脱工業化マーケットの発達による専門職や職業構造の変化、ポストモダン知的文化の不均衡や混乱などから、今後、「素質・能力教育」（education for capability）という新しい高等教育理念や目的の重要性を強調している（Scott, 2002）。

また日本においては、2007年に金子氏が、中世大学成立以降の長い歴史の中で、大学カリキュラムはいかにして社会の要請により変化を遂げてきたのかという点を整理したうえで、「職業人養成」、「リベラル・アーツ」、「学術的な真理探究」といった3つの大学教育の特徴や問題点を論じている（金子, 2007）。

筆者も歴史的・比較的な視点から、リベラル教育理念（liberal education, 紳士養成）、職業・専門職教育理念（vocational & professional education, 職業人や専門家養成）、科学教育理念（scientific education, 研究者養成）及び一般教育理念（general education, 市民養成）という4つの大学教育の理念とそれに対応した学士課程カリキュラムモデルを整理している（黄, 2007）。

今までの先行研究は具体的な高等教育の目的や大学教育の類型についての分析が多く、哲学的・理念的レベルにおける研究成果が少ない。今後高等教育の進展がますます不透明、かつ複雑な時代を迎えるため、新たな哲学思想や高等教育学説・理論を構築、発見することは、特色ある教育目的や新しい人材像を求めめるなかで肝要であろう。

政策・方針

政府や個人、団体、企業などが、哲学的・抽象的レベルにおける教育の理念や人材養成の目的を遂行するため、公文書や基本的な人材育成に関する教育方針の公布を通じて様々な手段や、特定の方法、進路をとっている。カリキュラムの政策に関する研究領域は多岐にわたり、かつ複雑であるが、少なくともこうした政策が誰によって、どのようなプロセスを経て、どのような形で打ち出されたのか、またどのような手段で実施されるのかという点について、歴史的、比較的、社会的などの視点から分析することが不可欠である。なかでも、特に諸政策が誰によって、あるいは何のファクターによって定められたのかという問題が最も重要であろう。表2が示した通り、時代の流れや国々の事情により政府（中央・地方）、学術・専門職団体、そして企業を含む市場といった3つのファクターは大学教育カリキュラムの政策制定にきわめて大きな影響を与えたと考えられる。

例えば、1990年代までの旧ソビエトや中国の場合、計画経済体制に基づいた中央集権制の下で、

中央政府が全国統一の大学教育カリキュラムに関する政策を作り上げたことは事実である。これに対して、アメリカの場合、基本的には地域別・専門分野別専門職団体が主要な役割を果たしてきている。

高等教育の構造

教育理念や目的、政策を実現するため、高等教育システムを構築するのは欠かせないことである。その国において作られた高等教育システム・構造もその国の教育理念や目的を反映しており、また高等教育の構造からその国の高等教育の特徴やモデルもまとめることが可能である。さらに新しい教育理念や目的、特に教育政策を遂行するため、それらに相応しい高等教育のシステム・構造に対する見直しや再構築を行うことはいうまでもない。したがって、カリキュラム研究のため高等教育の構造を分析する際、主に2つの側面に焦点を当てる必要がある。その1つは大学をはじめとする高等教育機関の構造であり、もう1つは在学者の構造である。前者は高等教育機関の現状を意味している。横軸としては、各機関の種類（設置者別や専門分野別）の位置づけ、特に大学（university）という伝統的機関は非大学セクターとの役割分担などの内容を含んでいる。縦軸としては、教育段階別（2、3年制や4年制など）の各機関の位置づけ、及びこうした機関の高校・大学院との役割分担などである。後者は在学生の基本構成（年齢別、男女別）および分布（機関別、教育段階別、学問分野・専攻別）などが含まれる。

こうした横と縦の軸から分析することによって、高等教育の構造による大学カリキュラム編成や変化などに対する影響を明らかにすることが可能となる。また理念や目的、政策は現実の高等教育の構造と一致していない点やその間の葛藤や不均衡、不安定などの部分が指摘できて、改善対策を立てることも考えられる。

カリキュラム（機関レベル）

機関レベルにおけるカリキュラムに関する研究の主な内容には、全学授業科目区分や授業科目の内容構造、総単位数、総単位の配分と各科目の卒業要件単位数に占める比率、そしてそれに関連する全学教育組織支援体制、教職員、学生募集政策や学生の構造などが含まれる。特に日本においては、各大学における建学精神、大学の歴史と伝統に相応しい全学カリキュラム、また競争的環境の中で輝く個性を持った全学カリキュラム改革に伴って、さまざまな創造的な改革の試みが行われているため、全学カリキュラムの内容をはじめ、教育組織、教職員人事、学生の支援などを、全方位的に捉えることが欠かせない。

ここで強調しておきたいのは、学士課程カリキュラム全体の問題は高校教育カリキュラム、特に大学院教育カリキュラムと密接な関係を持っているため（図2）、大学4年間のカリキュラムには、高校教育カリキュラム及び大学院教育カリキュラムとの接続や有機的な融合についての研究が不可欠だということである。

カリキュラム（学部・専攻・講座レベル）

学部や専攻・授業レベルにおけるカリキュラムの研究について、特に留意すべき点は2つあると考えられる。

第1は、どういう基準や視点に基づいて学士課程（専攻や講座など）カリキュラムの理念・目標が定められるのかという問題である。表2で示したように、大学は大学院との接続と融合という課題を考えたうえで、21世紀の多くの大学において、少なくとも職業・専門職志向型、研究者志向型、学生の人格向上を目的とする一般教育（general education）という3つの人材養成モデルが学士課程カリキュラムの編成に大きな影響を与えている。学士課程カリキュラム、特に学部や専攻・講座のカリキュラムの性格というものは基本的には、こうした3者関係の変動や調整に影響される。実は、この3者の間における不均衡や混乱により多くの学士課程教育に問題が生じているとしばしば指摘されている。近年来、多くの国々において、アメリカの一般教育をモデルに一般教育や教養教育を強調し基礎教育を拡充すると共に、様々な能力・素質の養成重視する改革が実施されている。しかしながら大学と大学院との接続や融合という視点から、特に高学年の学生向けカリキュラムの編成については、職業・専門職人材養成を中心に進めるべきなのか、あるいは大学院への進学のため研究者養成にもっと力を入れられるべきなのかという問題は、今後ますます重要な研究テーマの1つとなるであろう。また日本の場合、主として学士課程教育の理念・目標は、現行のカリキュラムや指導体制との関係という課題が挙げられる。例えば、教育理念・目標に照らしたカリキュラムの開発の状況、各授業科目の区分、相互関係及び卒業要件単位数の変化などである。

第2は、学生の受け入れ及びそれらのニーズに応えるカリキュラム開発の課題である。大衆化の進展によって、従来の特定期層やエリートのためのカリキュラム構造に関する再構築が求められている。また、多様な学生に対応するため、導入教育や補習教育がカリキュラムの重要な一部として位置づけられている。したがって、学生の変化による各学部や専攻における学生募集をはじめとするカリキュラムの構造や内容の見直しに関する研究にも注目すべきである。

講座や授業レベルにおいて、研究対象となるのは、授業の目標策定および授業の展開をはじめ、シラバスの作成、学年進行に伴う学生への指導、教授法の改善、学生に対する進路指導・支援体制の改善などである。

結果・効果

カリキュラムの結果・効果とは、学士課程カリキュラム教育の理念・目標がどこまで達成されるかというカリキュラムのアウトカムである。それはカリキュラムの理念・目的、政策、高等教育の構造、特に機関レベルの教育使命、学部や専攻・講座の教育目標と直結したものであり、学生は特定の大学や学部・専攻のカリキュラムに基づいた大学教育を通じて得た教養や、知識、能力を全般に反映し、その教育の理念や、目的、政策、目標の有効性も示す重要な「証明」でもある。最も重要なのは、こうした「証明」がカリキュラムの改善や、教育の目的・目標の見直し、教育組織、指導体制の再構築などに活用されることである。近年来、アメリカやイギリスを始め、多くの国々がすでにこれを大学教育や人材養成の質の直接的な根拠として認識しており、大学カリキュラムに関

する研究の重要な一側面をなすと考えられる。

具体的には、その研究内容には少なくとも2つの側面が含まれている。まず、量的には、卒業生の進路や進学状況である。例えば、卒業率や、学位別・資格別卒業生の情報、就職先・進学先のデータなどである。次に、カリキュラムの効果を測定する基準の研究や、学生のカリキュラム目標達成度、カリキュラムに対する満足度、卒業生の知識や能力に対する雇用先の評価などの質的側面に関わる課題である。

ここで強調しておきたいのは、カリキュラムの理念・目的の特定から、カリキュラムに関する政策の形成、カリキュラムの理念や政策を実現する高等教育システムの構築、各レベルにおける教育目標の設定やカリキュラムの実施へのプロセスが一般的で不可欠であるものの、それらの相互関係は、決して一方的にカリキュラムの理念からカリキュラムの結果・効果に影響を与えたりするようなトップダウン方式ではないということである。カリキュラムの結果・効果を検証や活用することを通じて学部や専攻・講座のカリキュラムの改善から、大学教育の使命や目標の再検討、高等教育システムの再構築、教育政策の見直し、理念・目的の再検討、新たなカリキュラムの理念の発見に至るプロセスも同様に重要である。要するに、こうしたさまざまな要素や内容が相互作用しており、それぞれの要素間の関係に着目する必要がある。

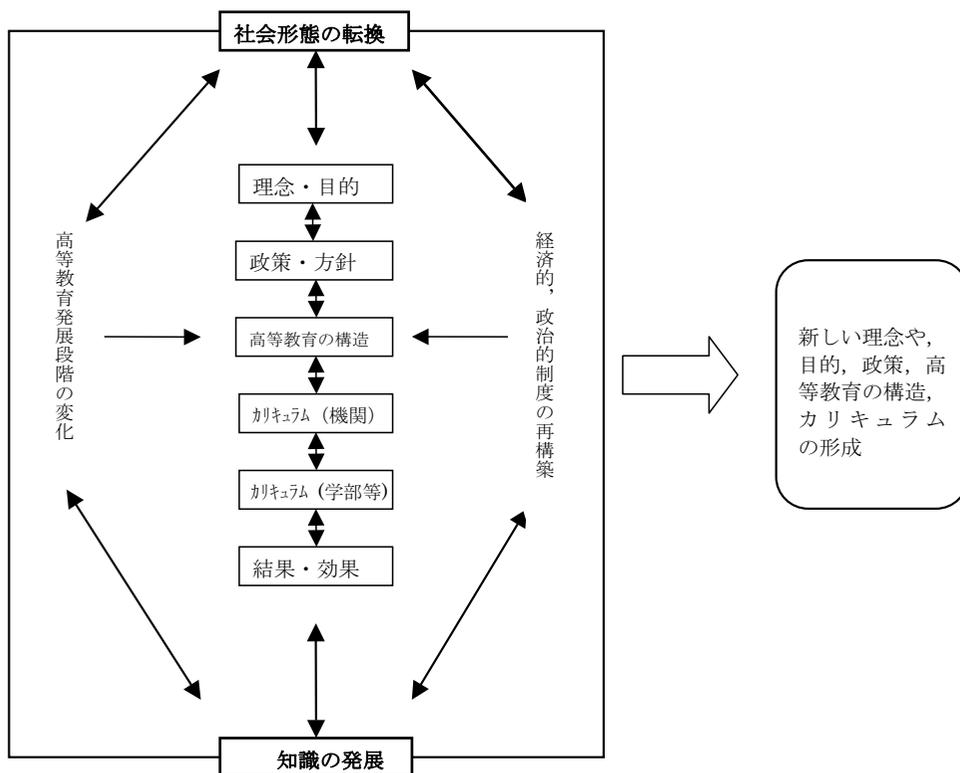


図1. 大学カリキュラムの変化

最後に、カリキュラム研究を行うためには、様々な社会的、政治的、経済的な要因の変化と影響を視野に入れる必要もある。歴史的・比較的な視点からみると、特に19世紀以降、近代産業革命の勃発や近代国家の発足をはじめとした大学外部の多様多様なファクターによって大学教育の理念やカリキュラムモデルは変化しつつある。したがって、図1でまとめた通り、20世紀後半以降、大きな社会形態が変化しつつあるなかで、特に大学教育カリキュラムの変化に対して著しいインパクトを与えたと思われる外部要因及びこれらの要因とカリキュラムの変化との関係に注目する必要がある。例えば、高等教育の大衆化そしてユニバーサル化はどのように大学教育の目的、高等教育の構造、特にカリキュラムの構造、学生の学習方式に対して影響しているのか。また知識基盤社会の進展に伴い、大学教育において学習者に対しての新しいカリキュラムを提供し、社会変化に対する新たな知識や能力を養うのか。さらに各レベルのカリキュラムの編成・開発に対しては、学習者の幅広い能力の養成、言い換えれば、いかにして社会の多様なニーズに適応できる資質能力を育成できるのかという課題である。

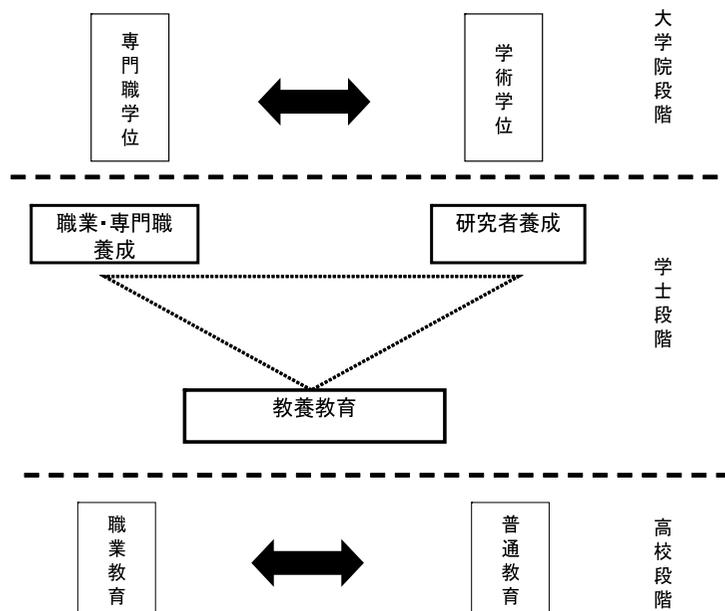


図2. 学士課程カリキュラムの開発と大学院教育、高校教育との関係

5. まとめ

大学カリキュラム研究を行う際、狭義の教育内容だけではなく、カリキュラムに関する教育理念・目的や、カリキュラム政策、高等教育の構造、各レベルにおける教育内容、組織、学生の受け入れ、カリキュラムの結果・効果を反映する卒業生の量と質も視野に入れる必要がある。

また、こうした研究は、単なる大学や教育機関内部におけるさまざまな要素に関する分析だけで

は不十分で、マクロ的、特に動態的な視点から大学と社会的変化や、知識の進歩、大学と高等教育段階の進展、高校教育・大学院教育との接続との関連性について考察することも重要である。

【参考文献】

- 安彦忠彦編（1999）『新版カリキュラム研究入門』勁草書房。
- 有本章（2003）『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部。
- 井門富二夫（1985）『大学のカリキュラム』玉川大学出版部，14頁。
- 金子元久（2007）『大学の教育力』ちくま新書。
- 絹川正吉（2006）『大学教育の思想—学士課程教育のデザイン』東信堂。
- 小林哲也（1997）「一般教育概念の国際比較」一般教育学会編『大学教育研究の課題』，玉川大学出版部。
- 黄福涛（2007）「大学教育理念と学士課程カリキュラムの改革」『大学論集』第38集，広島大学高等教育研究開発センター，125-141頁。
- 清水畏三・井門富二夫（1997）『大学カリキュラムの再編成』玉川大学出版部。
- 関正夫（1998）『日本の大学教育改革—歴史・現状・展望』玉川大学出版部。
- 関正夫（2006）「大学カリキュラム改革に関する研究の回顧と展望—学士課程教育を中心として—」『大学論集』36集，広島大学高等教育研究開発センター，31-67頁。
- 館昭（1997）『大学改革：日本とアメリカ』玉川大学出版部。
- Bobbitt, F. (1918) *The Curriculum*, Boston: Houghton Mifflin.
- Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching (1977) *Mission of the College Curriculum*, San Francisco Jossey-Bass.
- Clarke, M. L. (1971) *Higher Education in the Ancient World*, London: Routledge & Kegan Paul, p. 55.
- Cummings, W. K. (2003) *The Institutions of Education: A Comparative Study of Educational Development in the Six Core Nations*, Cambridge: Cambridge University Press, p.142.
- Dewey, J. (1938) *Experience and Education*, New York: Macmillan.
- Dressel, P. L. (1963) *College and University Curriculum*, The Center for Applied Research in Education, Inc.
- Ellis, A. K. (2004) *Exemplars of Curriculum Theory*, Eye On Education, Inc.
- Evelyn, J. S. (1996) *Curriculum: An Integrative Introduction*, New Jersey: USA, Prentice-Hall Inc. p.iii.
- Goodlad, J. I. and Su, Z. (1992) 'Organization of the Curriculum', in Jackson, P. W. (ed.), *Handbook of Research on Curriculum*, New York: Macmillan, pp.327-344.
- Goodlad J. I. and Associates (1979) *Curriculum Inquiry: The Study of Curriculum Practice*, McGraw-Hill Book Company, p.349.
- Kelly, V. (1999) *The Curriculum—Theory and Practice*, Paul Chapman Publishing LTD.
- Lattuca, L. R. et al. (ed.) (2002) *College and University Curriculum: Developing and Cultivating Programs of Study that Enhance Student Learning*, Boston: Pearson Custom Publishing.

Levin, A. (1977) *Undergraduate Curriculum*, San Francisco: Jossey-Bass.

Lewy, E. A. (1991) (ed). *The International Encyclopedia of Curriculum*, Pergamon Press, p.15.

Marrou, H. I. (1956) *A History of Education in Antiquity*, Sheed and Ward Ltd., p.47.

Scott, P. (2002) 'The Future of General Education in Mass Higher Education Systems', *Higher Education Policy 15*, Pergamon, pp.61-75.

Stark, J. S. and Lattuca, L. R. (1997) *Shaping the College Curriculum: Academic Plans in Action*, Allyn and Bacon.

Tyler, R. W. (1949) *Basic Principles of Curriculum and Instruction*, University of Chicago Press.

The Framework of Research in University Curriculum: Based on a Review of the Existing Study of Curriculum

Futao HUANG*

This article is mainly concerned with the framework of research concerning university curriculum. By examining the existing studies of curriculum for primary and secondary school education and some research achievements on university curriculum over the past decades, the author defines the term university curriculum and points out similarities and differences between its definition of university and that of the curriculum at the levels of primary and secondary school education. From historical, comparative and sociological perspectives, the author identifies several levels or types of university curriculum. They include the ideal curriculum or the philosophy of curriculum, the curriculum reflected in educational policy or guidelines by stakeholders, the characteristics of curriculum embodied in the structure of higher education, the curriculum at an institutional level, the curriculum at faculty and study levels, and the outcomes of curriculum. The article also deals with the linkages and interactions between different levels or types of university curriculum and how the changes in university curriculum are influenced by external and internal factors.

In the article, the author emphasizes that research in university curriculum should not merely focus on what is taught in any university or higher education institutions in a narrow sense; more attention should be placed on the study of curriculum in a broad sense, including the various levels or types of curriculum identified earlier. Moreover, it is necessary and important for researchers to pursue the study of university curriculum and build up a framework of research by touching on the relationships with the changes of society, the advancement of knowledge, and university, the relationship between the phase of higher education development and the university, and the linkage of senior high school education, graduate education, and undergraduate education from a micro and dynamic point of view.

* Professor, R.I.H.E., Hiroshima University

